

県央・林業部トピックス（12月号）

シカのライトセンサス調査を実施しました。

中国山地のシカの生息は、高い捕獲圧等により明治末期に姿を消したと考えられていましたが、近年は隣県からの分布拡大により県境の市町において、目撃や捕獲数が増加しています。そこで、循環型林業拠点団地や林業公社収獲事業実施地においてシカの生息状況や被害状況を把握して、被害対策につなげるための林業被害調査が全県でスタートしました。

今後、計画的に被害対策を進めていくうえでシカの頭数、増減、分布範囲のモニタリングが必要で、県央事務所では昨年より邑南町の大草・岩屋・伏谷地域で2ヵ月に一度ライトセンサスによる調査を行っています。

ライトセンサスは、日没後に低速走行の車からスポットライトを照らし確認できたシカの数をカウントします。多くの動物の眼は夜間ライトをあてると反射により目が光るので遠くにいるシカも見つけることができます。

調査地は広島県境の大草・岩屋・伏谷の3箇所で、実施しています。今回12月の調査では大草で2頭(0.2頭/km)、岩屋で23頭(2.23頭/km)、伏谷で1頭(0.22頭/km)確認し、岩屋は高密度に生息しているという結果でした。岩屋では、ヒノキとコウヨウザンの植栽木にシカによる食害も確認しました。

岩屋地域周辺では拠点団地、国有林も含め、主伐・再造林が行われている箇所があり、他地域以上に早急な対策が求められます。

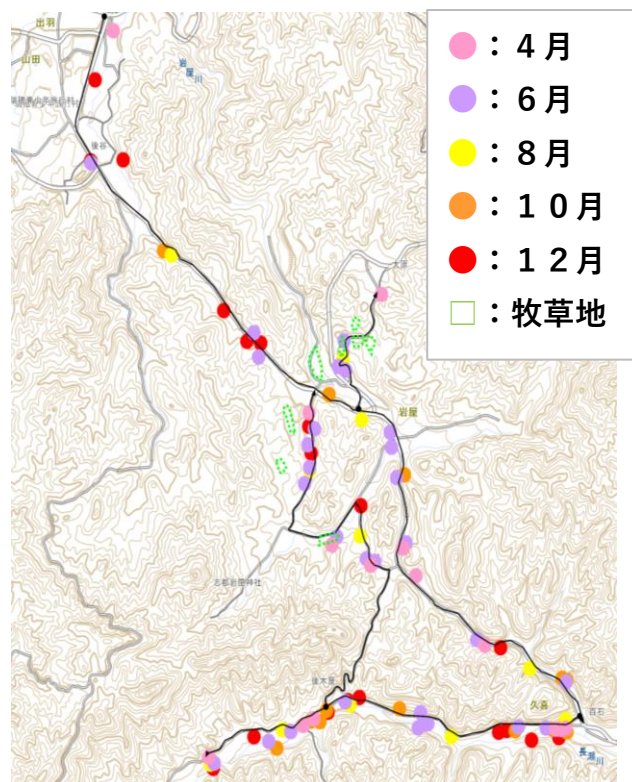
防護柵やツリーシェルターを使った対策も有効ですが、コストがかかる為、捕獲による対策が重要です。岩屋地域をはじめ多くの地域で猟師の高齢化が進んでいます。新たな担い手の確保、ベテラン猟師からの技術の伝承が今後の課題です。



調査風景



造林地内にいたメスジカ



岩屋地域での調査時のシカ目撃箇所